

『祈りにもとづく使徒的共同体とは』

一人ひとりがキリストの体

最終回となった今回は新型コロナウイルスの影響が心配されたものの、約80名のご出席を頂きました。受付で抽選し、9つのテーブルに分かれて着席頂きました。

1 「聖書における共同体2」 英主任司祭

英主任司祭からは、前回に引き続き聖書における共同体についてお話頂きました。

ギリシャに宣教に向かったパウロは、アテネではうまく行かず、コリントに滞在して教会を設立した。ある意味で成功した教会であったが、即ち問題も多くあった。

パウロが書いた4つの手紙のうち2つが残っているが、その第一の手紙に当時の教会の問題点が書かれている。

コリントの信徒への手紙 第一章11節には分派活動が書かれている。共同体の最大の問題は仲間割れである。分裂しない団体は、カリスマ的な指導者がいるか、活動が不活発かのどちらかである。活動に熱心だからこそ仲間割れが生じると言える。

● 主の晩餐の制定 (コリントの信徒への手紙 11章)

パウロはミサとその後の食事会(アガペ)、ミサと共同体活動の一致が必要であると説く。食事会で仲間割れを起こしては、ミサでキリストの体を頂いても意味がない。教会共同体とミサのあり方は切っても切れない関係である。当教会のように大きいと難しいが、共同体の一致感が味わえるのがミサである。

第5回ワークショップにおいて、キリストの体は「ご聖体と教会の2つの意味を持つ」と述べた。

初代教会は「ご聖体を神秘的な体、教会を実体的な体と捉えた。弱体化した中世の教会は、教会を神秘的な体としたが、第一バチカン公会議以降は初代教会の解釈に戻っている。

教会共同体を神秘にしてはならず、パウロの言う意味で本当のキリストの体か否かを絶えず振り返り、刷新することに意味がある。ミサに与えることは、神と自分の関係のみならず、共同体との繋がりを意識すること、つまりミッション2030のテーマ「祈りを深める」と「共同体を生きる」は繋がっているのである。

● 一つの体、多くの部分 (コリントの信徒への手紙 12章)

これは、コリントの教会で分裂が起きた時の話である。

共同体においては、いかに多様性を認めるかが難しい。当教会は大きすぎて、自分がキリストの体の一部と思いがたい。自分なりにキリストの体の一部として生きていけば幸いである。

来年度のテーマ「新しい協働」はキリストの体のイメージで考えるとよい。自分や自分の所属するグループが、イエスさまの協働者としてイエスさまのミッションを果たしていくイメージで考えたい。

留意したいのは、活動していないと批判されるという活動主義の問題である。「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要」(22節)である。教会共同体は利益集団ではないので、最も弱い人を大事にできるか否かが重要。皆がいきいきとしてイエスさまの恵みを分かち合いたい。

● 神の国(共同体)での生き方(マタイによる福音書 18章)

神の国、即ち共同体での

生き方の第1の根本原則は自分を低くして子どものような心を持つことである。国と言う以上、2人以上の共同体であり、ネットワーク(繋がり)があつてこそ神の国になる。当教会の目的はネットワーク型教会、即ち小共同体のネットワークである。

第2原則は、見失われた1匹の羊(小さな者)を大切にすることである。1匹が戻れるよう99匹は回心すべきである。

第3原則はトラブルメーカーに対するゆるしである。共同体で問題が起きたら、まず当事者間で、次に何人かで話し合い、解決しなければ教会に申し出る。最終的にはゆるす。共同体の最大のテーマはゆるしである。最小の共同体である2人で祈れば神は答えを下さるとの励まし書かれている(同18章19節)

引き続き各テーブルで和やかに、講話の内容についての分かち合いが茶話会形式で行われました。

3 今年度ワークショップの振り返り

最終回の締めくくりとして、全6回のワークショップの内容を振り返りました。

また、新受洗者に配付している小冊子「信仰のしおり」(増補版の改訂版折込み)のご紹介を行うと共に、教会生活に関する疑問点、困り事があれば用紙に記入頂くようお願いいたしました。記入内容を検討し、信仰のしおりに反映させる予定です。

2020年度

「新しい協働」フォーラム ミッション2030

日程のお知らせ
4月26日、7月12日、9月13日、10月25日、
12月27日、2月21日の日曜日、全6回

詳細は、チラシ、ポスター、教会報マジスにてお知らせいたします